

スピリチュアリティの覚醒を求めて

「魂」に働きかける純粋倫理の視点

田中範孝（倫理研究所研究員）

はじめに

近年にわかに、「スピリチュアリティ（霊性）」という語が様々な分野で目に付くようになった。思想、哲学の領域はもちろん、宗教学、文学、さらには教育、医療、倫理の領域でも、「スピリチュアリティ」について語られる時代である。

流行の発端は、一九九〇年代から、WHO（世界保健機関）の健康の定義にスピリチュアリティの言葉を加えるという提案が出たことからである。

すなわち、現行の定義である「健康とは、肉体的、精神的および社会的に完全に幸福な状態であり、単に疾病や病弱がないということではない。（Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.）」に対し、改正案では、

「健康とは、肉体的、精神的、霊的および社会的に完全に幸福な動的状態であり、単に疾病や病弱がないということではない。（Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.）」⁽¹⁾

と、「スピリチュアル」の言葉が盛り込まれたのである。結果として、この改正案はWHOの最高意思決定機関であるWHA（世界保健総会）で否決され、今なお公式に承認されるまでに至っていない。がしかし、この問題は世界史的に「霊性の時代の到来」を印象付ける象徴的な出来事であった。

この改正案を決議した時、WHOの執行委員会では「スピリチュアリティは、人間の尊厳の確保や生活の質を考えるために必要な、本質的なものである」という意見や、生きる意味や生きがいを表す言葉であるとの意見が出された。⁽²⁾ このWHOの動向に即応するように、「霊性＝スピリチュアリティ」を、「人間を人間たらしめ、癒しや気づきや創造の病や『健康』に、導き促していく存在基盤」にフォーカスして、^{スピリチュアリティ}「**霊**性」の発露にふかい意義を見出そうとする、人体科学など多様な学問を横断する研究者が徐々に現出しはじめている。⁽³⁾ そうした人々が半ば期待をもって見据えるのは、宗教教団の枠を離れた、あるいはそれをこえた深い「宗教性」の発現する時代の到来である。

本稿ではこうした時代の動向を見据えながら、純粋倫理のはたしうる役割について考えていきたい。人間のスピリチュアルな領域に純粋倫理ははたしてどう向き合い、どう応えていくのか。それは、「霊性の時代」における倫理運動を展望する手がかりともなるのではないだろうか。

いうまでもないが、本稿はスピリチュアリティの全体像を網羅的に示すものではない。

あくまでスピリチュアリティなる領域にアクセスする純粋倫理のスピリチュアルな側面についての考察であることをお断りしておきたい。